

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 4 月 22 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520744

研究課題名(和文) 解体期ローマ帝国の政治動向と社会の様態に関する研究

研究課題名(英文) Political process and society in the last stage of the Roman Empire

研究代表者

南川 高志 (MINAMIKAWA, Takashi)

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：40174099

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円、(間接経費) 990,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ローマ帝国を地中海周辺ではなく、アルプス以北の地域に視点をおいて、その解体過程を検討したものである。イタリア中心の政治史ではなく、ローマ対ゲルマンの二項対立に基づく民族抗争史でもない、人々や集団のアイデンティティの重層性や可変性を重視する研究を実施した。そして、成果を踏まえて、帝国としてのローマの崩壊を5世紀初めとみる歴史叙述を著書『新・ローマ帝国衰亡史』として発表した。「ゲルマン人」の扱いなど重要な論点に関する研究を生かして、古代終焉期における継続的要素を強調する古代末期派の説と異なり、ローマ人としてのアイデンティティの喪失から帝国の解体を強調する独自の見解を提示した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to examine the process of the fall of the Roman Empire in the West from the view point of peripheral provinces. The process of the decline and fall of the Roman Empire has generally been depicted as the fall of Roman Italy or as the history of conflict between the Romans and the Germanic people. And the scholars of the Late Antiquity School have emphasized the aspects of continuation at the end of the Ancient world. On the basis of researches of this study, however, I stress the multilayered and variable structure of ethnic groups' identity in the late Roman world. I also consider the loss of Roman identity at the beginning of 5th century as the fall of the Roman Empire. At the final phase of this project, using the results of researches, I wrote and published a book under the title "the New History of the Decline and Fall of the Roman Empire".

研究分野：西洋古代史

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：ローマ帝国 ゲルマン人 属州 ゴート族 テオドシウス1世 ユリアヌス帝 フランク族 アラマンニ族

1. 研究開始当初の背景

本研究を開始した当初の背景としては、以下の3点をあげることができる。

まず、1980年代から学界で台頭し始め、1990年代には主流となったといってもよい古代の終焉期の新たな研究傾向、すなわちピーター・ブラウン教授流の「古代末期」論に対して、1990年代後半から批判が続出し、ローマ帝国末期をめぐる解釈や研究法が流動化してきたことがあげられる。古代の終わりとは長らくローマ帝国の衰亡と重ね合わされて理解され、叙述されてきたが、20世紀の第3四半期を過ぎて、ブラウン教授の画期的な研究が現れて以降、伝統的な見方は次第に斥けられるようになった。ブラウンは、2世紀から8世紀までの時代を、古代でも中世でもない独自の価値を持つ「古代末期」(Late Antiquity)と定義して、ローマ帝国の終焉期を「ローマ帝国衰亡史」というネガティブな観点から解放し、新しい社会が形成されてゆく積極的な時代として理解しようとした。こうした研究の観点やブラウン自身が展開した宗教や心性に関する研究は多くの研究者を魅了し、古代の終焉期の研究は急激に活況を呈するようになる。「ローマ帝国の『衰亡』」を語ることは学界ではタブーとまで言われるほどになり、かわって「ローマ世界の『変容』」が論じられるほどになったのである。

ところが、1990年代の後半から、「古代末期」派への批判が現れ、21世紀にはいと、「ローマ帝国の衰亡」を正面から掲げた著書が数点出版されて注目を集めるようになり、また「古代末期」派の研究の多文化主義的傾向など特徴や難点が指摘されることもしばしばとなった。「古代末期」派が社会・宗教・心性を論じることに重点を置き、政治を論ずること少なく、また後にビザンツ帝国へ移行してゆく帝国東部を重視して、ローマ帝国という政治的枠組みが消滅する帝国西部を重視しない点にかねてより疑問を抱いていた私は、「古代末期」派とは異なるローマ帝国終焉期の時代像を描くことができるか否か検討することが、学界の緊急の課題であると認識するようになった。

第二点目として、ヨーロッパの西欧初期中世史研究者たちの古代・中世移行期研究が進展し、わが国でも中世史研究者の間では理解が進んでいるので、これに対して古代史の側からローマ帝国解体期の時代像を提示しなければならない状況にあることをあげておきたい。とりわけオーストリア、ウィーン大学の学者たちを中心とした研究の進展は、「ゲルマン人」というローマ帝国解体に関わった重要な集団の説明にきわめて重大な変化をもたらしたが、欧米においてもわが国においても、古代史研究者の側ではその成果が充分取り込まれてはならず、分析の仕方や時代像の描き方が、1980年頃の水準から大きくは進歩していないのである。

第三に、ヨーロッパ各国歴史学界での属州

史研究の急速な進展があげられる。それによって、イタリア外の属州、特にアルプス以北の諸属州での出来事や社会の様相、そしてその変化が次第に明らかになってきているが、そうした成果が帝国支配の解体過程の叙述に充分には取り込まれておらず、例えば410年にブリテン島のローマ支配が終わりを告げたことは重視されず、410年は依然として首都ローマのゴート族による掠奪の年という、イタリア中心の意義付けが一般的である。イタリアの外の帝国領研究の発展と変化を受けとめ、ローマ帝国の新たな全体像を提示することが必要となっている

2. 研究の目的

私はここ10年ほどの間、一般に地中海帝国として語られるローマ帝国を、アルプス以北の帝国領に視点を置いて分析しつつ、その本質を再考する研究を続けてきたが、本研究はそうした観点と研究蓄積を生かして、ローマ帝国の解体過程を検討しようとするものである。4世紀から5世紀の西洋世界が検討対象で、いわゆるゲルマン民族の大移動後に激変してゆくローマ帝国西部の政治体制や社会のありようを解明することになるが、これまでの属州史研究の蓄積を踏まえて、解体期のローマ帝国を、旧来の研究のようなイタリア中心の政治史ではなく、ローマ人と「ゲルマン人」を二項対立的に扱う民族抗争史でもない、人々や集団のアイデンティティの重層性と可変性を重視する独自の観点から分析することにした。その際、叙述史料だけでなく、考古学の知見を積極的に取り入れるように努めた。これにより、ローマ帝国解体の最も重要な経過が明らかとなって、学界の主流になっている「古代末期」論とは異なるローマ帝国終焉期の歴史像が描けるばかりでなく、おもに中世史研究者によって論じられてきた古代から中世への移行の問題に古代史研究者の立場から提言することもでき、さらに東洋世界の古代終焉期との世界史大の比較研究に素材を提供することも可能となる。こうしたことを大きな研究目的に掲げた。

3. 研究の方法

(1) 研究の主たる課題は、ローマ帝国西半部の政治秩序の変容過程を精緻に分析することであった。旧態依然たる見方に拠って分析するのではなく、21世紀の歴史学の観点から研究するために、本研究では勢力を失ってゆくイタリアの皇帝政府ではなく、破壊者とされてきた「ゲルマン人」勢力の分析に力を入れた。その際、従来からよく知られたアンミアヌス・マルケリヌス『歴史』をはじめとする叙述史料に加えて、考古学的な研究の成果を取り入れ、また独自に現地での遺跡や遺物の調査をおこなった。こうした方法によりながら、これまで「ゲルマン人」と一括りにされてきた人々の分析をおこなって、その多様な構成や複雑な実態を明らかにすると

もに、紀元3世紀以降の彼らとローマ帝国との関わりを明確にすることに努めた。

(2) (1)で記した研究を実践するためには文献収集とその分析だけでなく、遺跡と遺物の調査、そして研究者との意見交換が必要であった。最新の研究情報を入手し、現地で遺跡・遺物を観察するために、夏季に渡欧調査をおこなうこととした。

(3) 再検討の対象とした「古代末期」派の研究の評価を、21世紀初頭の研究成果や学界動向を踏まえて多面的に検討するために、規模は小さいながらも大きな効果の期待できる研究集会を開くことが大事な手段と考えた。

(4) 新しく構築できたローマ帝国解体過程の歴史像を狭い意味での学界にとどめず、広く発表するため、啓蒙書を執筆することを重要な課題と位置づけた。

4. 研究成果

(1) 移動前と移動期の「ゲルマン人」について、関連研究文献の調査・収集・精読に努めた。「ゲルマン人」については、タキトゥスの作品が再発見されたルネサンス時代からヨーロッパ諸国で熱心に研究が進められてきたが、ナチスの「ゲルマン主義」に対する反省もあり、第2次世界大戦後、とりわけ1960年代以降に新たな観点から大いに研究が進んだ。R・ヴェンスクス、H・ヴォルフラムらの「ゲルマン人」形成に関わるethnogenesis論を受けて、ドイツやオーストリアの学者を中心に、集団の実態や「民族」形成・発展に関わる研究がなされたが、研究は英語圏にも広がった。とりわけ冷戦解消後の民族紛争発生の中でしばしば言及される民族起源の主張に触発され、いわば政治状況に後押しされた形で中世初期の民族起源の扱い方が問題となるまで、議論は拡大した(P・ギアリの研究など)。さらには、ヨーロッパ連合の拡大が進展する中で、1990年代にヨーロッパ科学財団の大型プロジェクトで「ローマ世界の変容」がテーマとなり、ウィーン大学のW・ポールらが精力的に活動して、現在までその成果が刊行されてきた。

本研究は、まずはこうした最新の研究成果の刊行物を収集して精読し、研究の最前線を明確に把握することに努力した。また、本研究では、従来中世世界の形成に認識目標が置かれた海外の研究より、古代史研究者の立場から、ローマ帝国解体過程の分析に適用できる「ゲルマン人」に関する概念やデータを抽出して、批判的に検討した。とくに、フランク族とアラマンニ族、そしてゴート族を分析の対象とした。それによって、ゲルマン人といわれる集団が実に多様な構成をとり、「民族」としてのアイデンティティ形成もきわめて複雑であること、そのために「ゲルマン人」

「ゲルマン民族」という括り方は避けて、部族単位で扱うことが重要だとの認識に至った。また、いわゆる「民族大移動」の歴史像は大幅に変更されるべき状態にあり、アイデンティティの可変性の議論の下で、移動する集団の規模や行動の持つ暴力性についても、伝統的な解釈をそのまま維持することはとうていできないことが判明した。

(2) (1)で記した認識に到達できたのは、文献による研究だけでなく、遺跡や博物館における考古資料の調査を実施したことによるところも大きい。フランスやオランダ、ドイツ、オーストリアの遺跡や博物館での観察は、研究文献だけでは得られない多くの情報と具体的なイメージを私に与えてくれた。

同時に、ヨーロッパの大学での研究者との意見交換からも裨益している。研究の第1年目は、ケンブリッジ大学とハイデルベルク大学を海外での研究活動の場とし、第2年目はオクスフォード大学とケルン大学、第3年目はハイデルベルク大学、ケンブリッジ大学、オクスフォード大学にて研究した。第4年目はいわゆる「ウィーン学派」の研究を理解し、検討するためにウィーン大学の古代史教室とオーストリア・アカデミーの中世研究所を訪ねて、スタッフと意見交換した。第2年目の海外調査では、ゴート族研究の権威であるロンドン大学のピーター・ヘザー教授とも意見交換できた。こうした海外調査の結果、ヨーロッパの学者とは異なる、非ヨーロッパ圏の研究者としての独自性を備えた歴史像を提出する準備が整った。

(3) 「ゲルマン人」の研究を踏まえつつ、ローマ帝国の政治動向分析をおこなって、その成果の一部を、4世紀後半のユリアヌス帝に絞って論文にまとめ、『西洋古代史研究』(ISSN 1346-8405)誌上に発表した。皇帝としては統治期間の短いユリアヌス帝の意義を、その前の比較的長いガリアでの副帝時代を重視しつつ、諸部族との対応の分析を通じて論じたものである。

(4) 本研究の成果を広く発信するための試みは、研究第4年目の岩波新書『新・ローマ帝国衰亡史』刊行で結実した。「ゲルマン人」の問題をはじめ、学界の懸案に私なりの回答を与えつつ、5世紀初めにローマが帝国としての意義を失っていくまで叙述した。また、本書の参考文献を『西洋古代史研究』誌上に発表して、啓蒙書の学術的根拠を示した。

この書物で、本研究の目標であった、伝統的な「ローマ帝国衰亡史」でも「古代末期」派の歴史像でもない、私なりの解体期ローマ帝国像を描くことができたと考えている。

(5) 本研究の第4年目に研究集会を開催し、古代終焉期を専門にする外国人研究者2名に報告を依頼して、6世紀に至るまでの政治的

な展開や支配階層に着目した議論をおこなった。この機会に、「古代末期」派の意義を再度検討するとともに、西帝国の5世紀後半の消滅を越えて、もう少し後の時代に至るまでの歴史的展開について議論できたことは、今後の研究課題を考える上で有効であると考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2件)

南川高志「『背教者』ユリアヌス帝登位の背景」『西洋古代史研究』、査読なし、第10号、2010、pp.1-21

南川高志「研究覚書 拙著『新・ローマ帝国衰亡史』の参考文献について」『西洋古代史研究』、査読なし、第13号、2013、pp.65-75

〔学会発表〕(計 1件)

南川高志「ローマ帝国の衰退とビザンツ帝国」日本ビザンツ学会大会記念講演、2014年4月5日、佛教大学、招待講演

〔図書〕(計 2件)

P・サルウェイ(編)、南川高志(監訳)、慶應義塾大学出版会『ローマ帝国時代のブリテン島』、2011、389

南川高志、岩波書店『新・ローマ帝国衰亡史』、2013、219

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

南川 高志 (MINAMIKAWA, Takashi)
京都大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：40174099

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：